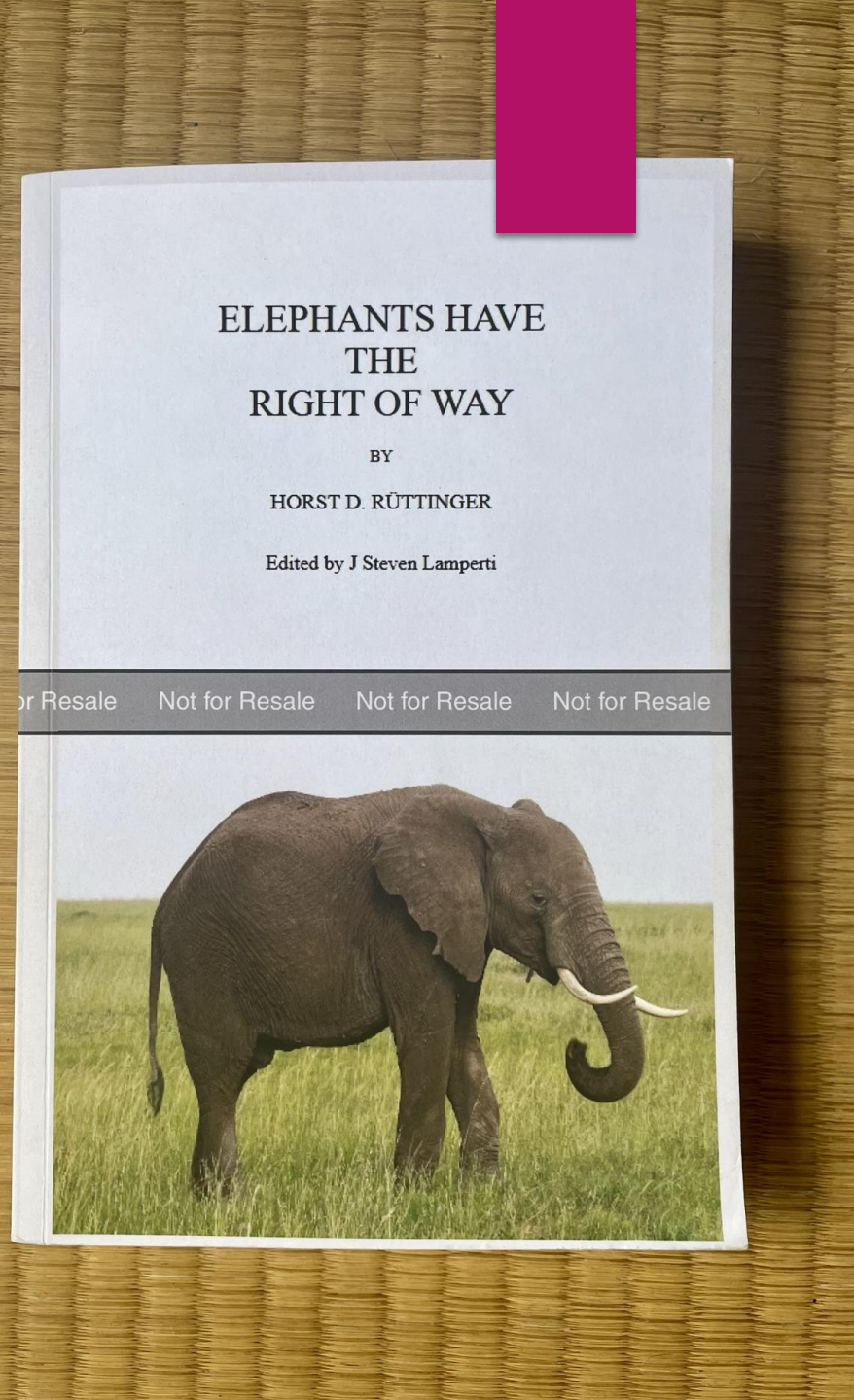
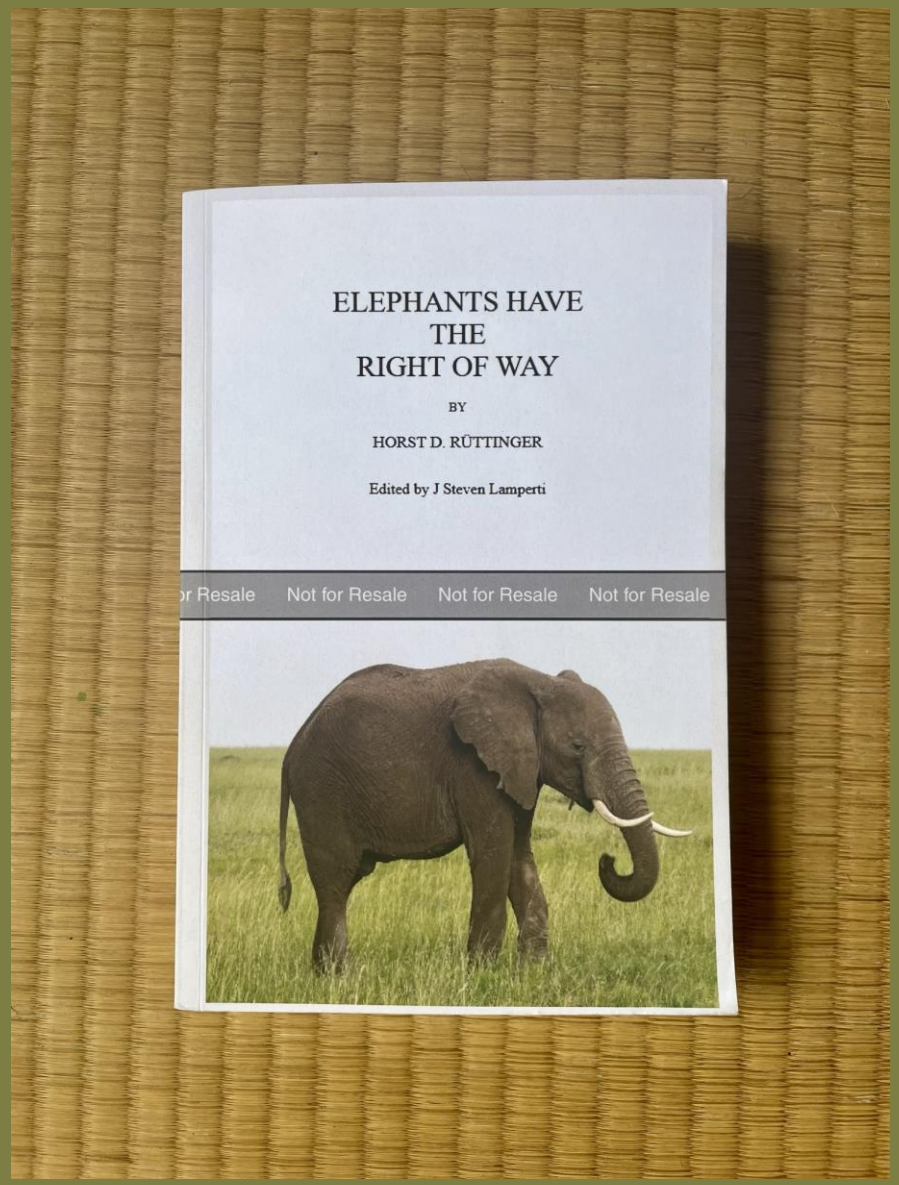
8月
「Memoiren」
アントニア・シュルト

1. 日本にいる間に私のおじいさんがなくなってしまいました。子供の頃、ほぼ毎年の夏をおじいさんとおばあさんの家で過ごしていたので、初めて親戚を失ってそのロスを感じた時だったと思います。

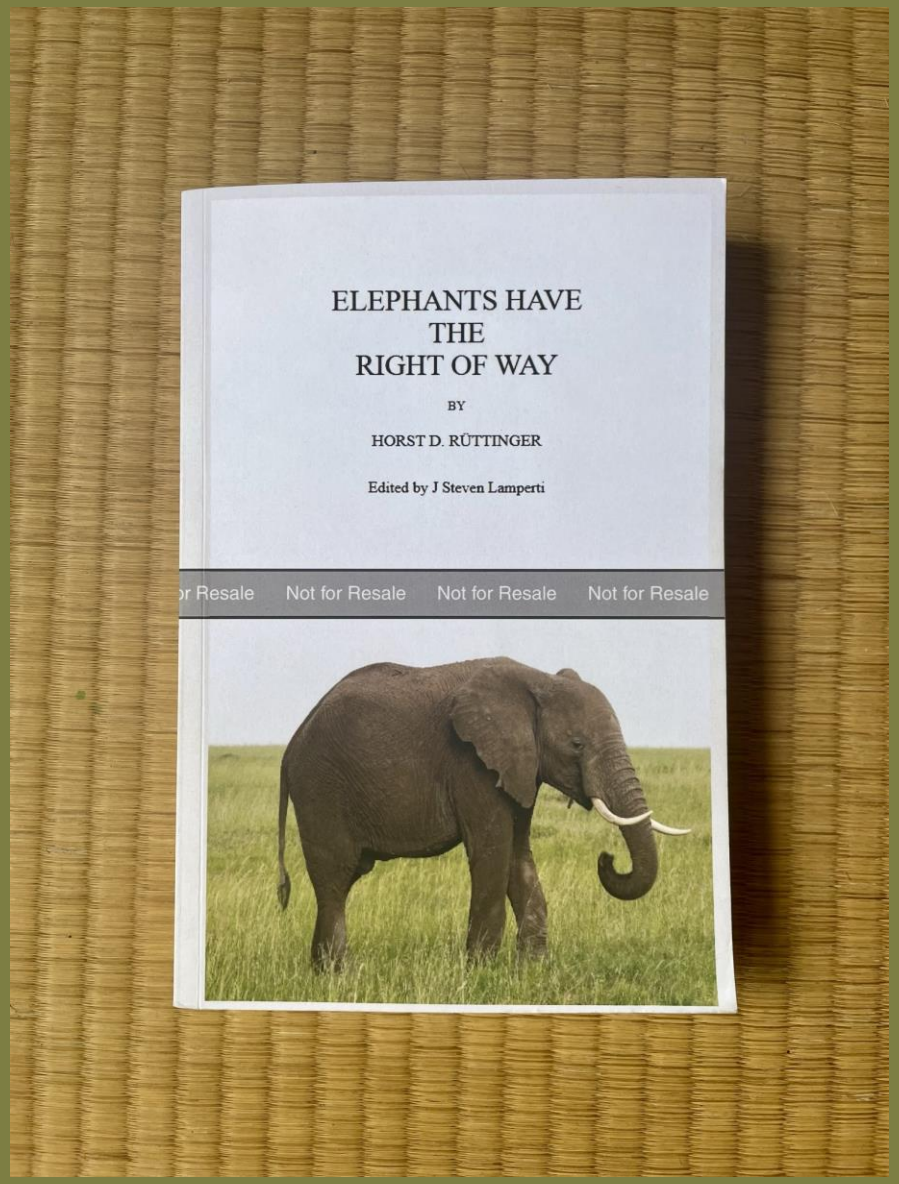
おじいさんが日記を書いていたこと知っていました。まだ生きていた頃よくパソコンの前に座って、メモをカタカタとタイピングした姿を見たという記憶があります。昨日、おじさんが本にして出版したおじいさんの回想記が郵便で届きました。来るとは知らなかったが、タイトルを見た瞬間に何だったかすぐ分かりました。

- 「Elephants have the right of way」といって、「通行権は像にある」。少し変わったタイトルと思われるでしょうが、おじいさんは何十年もアフリカの色んな国々で仕事をしていて、60年代、70年代という時代は像は当たり前に交通参加者だったと思います。





2.その場でゆっくり読む時間がなかったが目を通すだけで、色んなところに引っ掛かりました。自分の家族の記録や当時の様子などをおじいさんの言葉で読めるというのが素晴らしいことだと感じました。これが宝物だなぁとも思いました。

「Papier ist geduldig」というドイツ語の言い回しがあります。言いにくいことはい書けば良いというような意味です。「紙が待ってくれる」からです。

3. 私が知っていたおじいさんと中年のこの回想記の主人公はちょっと違うのかな。おじいさんが言いにくかったことはこの本に書けたのかな。まだ読み始めてはいないので、そこはこれから分かってくるだろうが、このように自分の考えの一部を残すというのは本人がそこまで気づいていないのかもしれませんが、遺族にとってとても大事なことだと思います。私が知っていたおじいさんはもちろんもう年配者で、性格や世界観などはもうある程度固まっていて、当たり前のおじいさんだったが、だれも完成品として生まれてこないので、生まれた時代の時勢やどんな経験を積んできたか、どんな人と出会ったかなどを足し算したものです。母を通しておじいさんの人生は私とつながっています。母が選んだ道もおじいさんの選んだ道の続きとしてとらえられます。すべてがつながっているという大きな認識でもあります。それでは、書いてみよう、私の日記を！